

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月25日現在

機関番号：42648

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21530862

研究課題名（和文） 保育現場に即した ICT 利用による保育者の QWL 支援プログラムの開発と展開

研究課題名（英文） Development of QWL Support Programs for Nursery and Kindergarten Teachers by Utilizing ICT Suitable for Nursery Fields.

研究代表者

金城 悟 (KINJO SATOSHI)

東京成徳短期大学・教授

研究者番号：70225118

研究成果の概要（和文）：

本研究は、保育現場で活用可能な QWL 測定尺度の開発を目的としたものである。保育者のワークストレスを分析した結果、保育職は身体的にも精神的にも負荷の高い仕事であることが明らかになった。保育者の意識構造の分析結果から保育者の QWL は 2 要因構造モデルで説明できることが判明した。M-GTA による分析結果を基に大変さ尺度 19、やりがい尺度 17、計 36 の尺度が QWL を測定する尺度として開発された。

研究成果の概要（英文）：

This study was to develop the QWL support program for nursery and kindergarten teachers. The results of analysis of work stress of nursery and kindergarten teachers clarified that their jobs gave them heavy workloads both physically and mentally. The results of analysis on consciousness structures of nursery and kindergarten teachers ascertained that their quality of working life (QWL) could be explained by a two-factor structural model. Based on the results of analysis by the modified grounded theory approach (M-GTA), thirty-six (36) scales—nineteen (19) scales on difficulty and seventeen (17) scales on worthwhileness— were developed to measure the QWL.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：保育者、ICT 利用、QWL 支援プログラム

1. 研究開始当初の背景

近年、少子化に伴う子育て支援事業の推進や地方自治体のコスト削減に伴う公設民営化、幼保一元化、保育時間の延長化、保育・幼児教育機関間の競争激化など保育者を取り巻く環境は大きな変化の渦に晒されている。保育者を取り巻く環境の変化は保育者の健康にも大きな影響を及ぼしている。保育者

が一般の事務職より自覚的疲労度が高いことが多くの先行研究で指摘されている。1994 年には大阪高裁で保母(現、保育士)の頸肩腕障害を職業病として認める判決がわが国で初めて出され、1997 年には最高裁で頸肩腕障害が保母の個人的特性に由来するものではなく、保育業務と因果関係があるものとし、労働災害が認められた。保育者の仕事は身体

的にも精神的にも負荷の高い環境にあるといえる。筆者(研究代表者)は保育者の精神的健康を明らかにすることを目的とした一覧の研究に取り組んできた。その結果、保育者の自覚的疲労度は一般企業事務職よりも有意に高い有訴率にあることが判明した(金城, 1997・2007)。保育者の自覚的疲労度の高さは職場適応にも大きな影響を及ぼしている(金城, 2007)。

保育者の精神的健康に関する研究知見は蓄積されつつあるが、これまでの先行研究は保育者の職務から発生するストレス研究に代表されるような精神的な側面の分析に焦点をあてた研究が主であった。現在の保育業務は多様化・複雑化しており、保育者の精神的な面からのアプローチだけでは保育者の実相を理解することが困難となっている。保育者のバーンアウトや離職率の高さを反映して、ワーク・ライフ・バランスの重要性が指摘されている現在、保育者の職場における健康状況を的確に把握する保育現場の就業環境・職場環境を包括した新たな概念(QWL)による尺度の開発と利用環境の構築が切に望まれている。

2. 研究の目的

本研究は、保育者のQWL支援プログラムを開発するための基礎資料を得るため、つぎの3点を明らかにすることを目的とした。

- (1) 保育者のワークストレスの実態を明らかにする。
- (2) 保育者の仕事に対する「大変さ」と「やりがい」の構造を明らかにする。
- (3) 保育者のQWL支援プログラムを構築する。

3. 研究の方法

(1) 保育者のワークストレス

① 調査対象者：1996年データは124名(幼稚園教諭63名、保育士61名)、2011年データは114名(幼稚園教諭52名、保育士62名)である。

② ワークストレスの測定：1996年と2011年のデータを比較するため、1996年の調査で用いた「身体部位別疲労症状調査」、「自覚症状しらべ(日本産業衛生協会産業疲労研究会、1970)」、「CFSI(藤井・越河・平田、1993)」の3つの調査尺度を2011年の調査でも用いた。調査は、保育者個人別に調査票を配布し、回答者自身が投函するという手続きで実施した。

(2) 保育職に対する意識構造

保育者の仕事に対する意識を半構造化面接法で調査した。調査結果は、M-GTAにより分析した。

① 調査協力者

関東圏の幼稚園及び保育所(園)に勤務する保育者14名(幼稚園教諭7名、保育士7名)である。調査協力者はすべて女性で年齢は22歳から53歳(平均29.9歳)、保育経験年数は2年～27年(平均8.3年)である。

② 調査方法

保育者の勤務する園、研究者の所属する大学、保育者の指定した場所において半構造化面接によりインタビューを行った。インタビュー時間は1時間程度ということで依頼し、調査協力者の業務や語りの状況に応じて45分～90分の間で実施した。インタビューの内容は調査協力者の承諾を得てICレコーダーにより録音した。実際のインタビューにおいては、構造化された質問を起点としながら、調査協力者の興味・関心に従って質問の内容を広げたり、質問の順序を変えたりするなど自然な会話の流れになるよう柔軟なスタイル(半構造化)により実施した。

③ 倫理的配慮

調査協力者に対し、あらかじめ研究の目的、方法、結果の公表、ICレコーダーによる会話の録音などについて説明した書面を作成し郵送した。調査実施当日、インタビューを実施する前に研究の目的、方法、結果の公表について説明し、了承を得た。さらに、インタビューで得られたデータは研究目的のために用いること、学会発表や論文で公にすること、それ以外の目的での利用はしないこと、個人が特定されるようなデータの使用はしないことを説明し、了承を得た。

(3) QWL支援プログラム

保育者のワークストレス及び保育職に対する意識調査の結果に基づき、保育者のQWLを把握するプログラムを構築する。

4. 研究成果

(1) 身体疲労症状の分析

「身体疲労症状調査」の24項目について有訴率を算出した結果を図1に示す。2011年の有訴率は1997年と類似したパターンを維持したまま全体的に右側の方向、すなわち有訴率の高い方向に移動している。この結果は15年前に有訴率の高い項目は2011年も高く、低い項目は現在も低い値を示す傾向にあることを示している。保育者の身体的疲労症状には保育者に特有の一定のパターンがあることを示唆しているものといえよう。

(2) ワークストレスの比較

「身体部位別疲労症状調査」、「自覚症状しらべ」、「CFSI」の3つの調査につき、各々の有訴率の平均値とSDを算出した結果を図2に示す。図2から2011年の有訴率は1997年と比較して高いことがわかる。1996年と2011年のワークストレスを統計的に比較検討す

るため、各々の調査で得られた被調査者の有訴数の中央値をマン・ホイットニーのU検定により分析した。その結果、「身体部位別疲労症状調査」、「自覚症状しらべ」、「CFSI」のいずれも 2011 年の平均有訴数が有意に高いことがわかった。2011 年に測定した保育者のワークストレスは、15 年前の保育者のワークストレスより高い値を示している。この結果は保育者のワークストレスは改善化とは逆に悪化している方向に進んでいることを示唆しているものと考えられる。

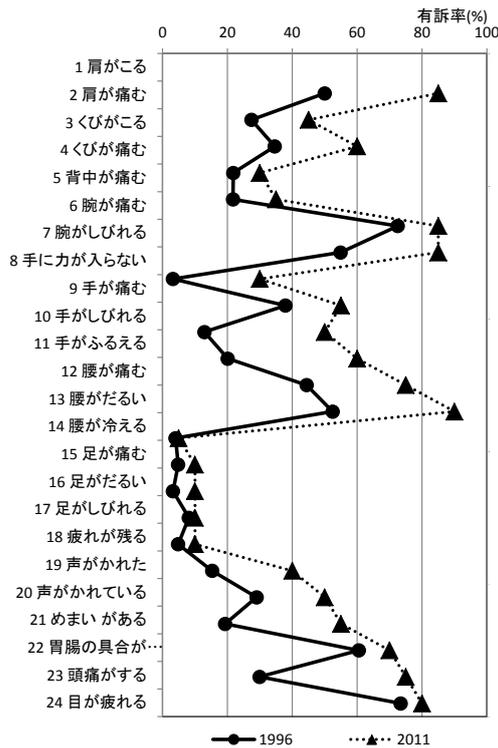


図1 身体疲労有訴率の比較

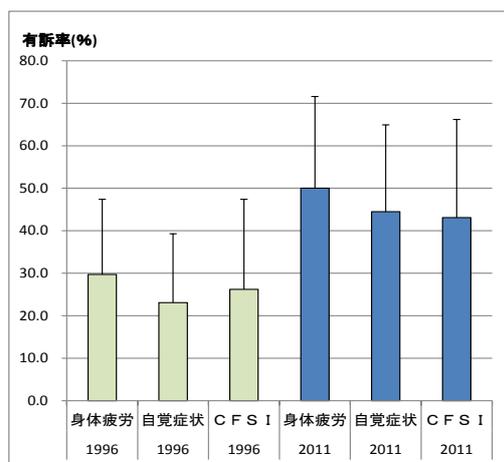


図2 身体疲労、自覚症状、CFSI 有訴率の比較

(3) 保育職に対する意識構造

保育者へ半構造化面接により得られたローデータは、M-G T A (Modified Grounded Theory Approach; 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ)を用いて分析した。M-G T Aによる分析の結果、「保育職の大変さ」に関しては 15 の概念、5つのカテゴリ、3つのコアカテゴリが、「保育職のやりがい」に関しては 12 の概念、4つのカテゴリ、2つのコアカテゴリが生成された。「保育職のやりがい」の分析から保育者になって得られる喜び・満足感という意識構造が抽出され、これを「保育職のやりがい」から分離し、【保育者としての誇り】というコアカテゴリとして生成した。

1) 保育職の大変さ

コアカテゴリ【子どもとの関係性・保育内容】は、保育内容の実践に起因する「大変さ」である。幼稚園と保育所(園)の保育内容は、幼稚園教育要領と保育所保育指針において規定されている。共通する保育内容としては、健康(健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う領域)、人間関係(他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う領域)、環境(周囲の様々な環境に好奇心や探究心を持って関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う)、言葉(経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う領域)、表現(感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする)の5領域がある。保育所(園)はこれ以外に生命の保持と情緒の安定の2つが養護に関わる保育内容として設定されている。保育内容は日々の保育実践の中核となるものである。保育者は子どもの健康と発達に配慮しながら保育目標を達成するため保育内容に関する指導計画(年間、期案、月間、週案、園によって日案)を作成する。保育者は毎日の保育がスタートする前に室内の換気や掃除などの作業を行いながら、当日の指導計画を確認し、必要な教材教具の準備や環境設定<毎日の保育前の準備>を行わなければならない。保育前の準備時間は約30分ほどであり、短時間内に数多くの作業をこなす必要があることが保育者の負担感につながっていると考えられる。

保育がスタートすると<子どもへの対応>に関する「大変さ」が出現する。子どもへの対応の難しさのうち、保育課題をこなすことが難しい子どもへの対応と子ども同士のトラブルへの対応は保育実践の中でも負担の大きい課題であることが分かった。<身体的負担>は、机やイス、教材教具の運びな

ど重い荷物を抱えながら移動する場面が多いことが影響している。また、遊びの指導も保育内容の重要な課題となっているため、保育者は日常的に身体動作を行っている。金城(2008)は年齢と性別をマッチングした保育者と一般企業事務職の勤務時間中(9:00-17:00)の歩数と運動強度を加速度センサー機能搭載のペドメーターで測定した。その結果、幼稚園教諭の平均歩数は13,040歩、保育士の平均歩数は11,450歩、一般企業事務職は4,454歩であり、保育者の勤務時間中の歩数は一般企業事務職の約3倍であることが分かった。運動強度を見ると、一般企業事務職の運動強度は約9割が安静状態やゆっくりめの運動強度の歩行で占められており、保育者は約4割が通常の歩行やジョギングなどの運動強度の歩行で占められていることが判明した。このことから、身体的負担には身体全体を動かす作業による課題が多いという保育者の仕事の特性も影響していると考えられる。

保育時間終了後は、〈保育後の片づけ〉や〈時間外勤務〉がある。保育に用いた教材教具の片づけや明日の保育内容の準備、保護者との連絡帳や保育日誌など保育記録の作成、子どもに関する情報交換や会議などの業務がある。保育者は保育時間後も多様な仕事に従事しており、このことが負担感につながっていると考えられる。

2) 職場環境・労働環境に起因する大変さ

職場環境・労働環境に起因する大変さとして、《人間関係の困難さ》、《保育内容以外の職務に関する負担感》、《自分ではどうすることもできないことへのネガティブな感情》があげられた。人間関係の困難さは、職場の上司、同期、後輩との関係がうまく機能しないことによる負担感である。先行研究で保育者の職場の人間関係が保育者の精神的健康に影響を及ぼすことが指摘されている。赤田・滋野井・小正・友久(2009)は保育士を対象とした調査結果から、「職場内の人間関係について、特に所長との態度と行動と、他の先生同士の人間関係にストレスを感じている人が多く、これらが精神的健康に影響を与えている可能性があり、重大なストレス要因となっている」ことを報告している。前田・金丸・畑田(2009)は、保育者の職場における社会的スキルが精神的健康に直接影響を及ぼすことを指摘している。「保育職の大変さ」として得られたカテゴリー《人間関係の困難さ》は、先行研究で指摘された結果と一致している。

《保育内容以外の職務に関する負担感》に関しては、〈会議の準備と報告の負担〉と〈事務作業の煩雑さ〉があげられた。保育者は会議の準備や報告に負担を感じていることが分かる。しかし、調査協力者の「日常の保育の

忙しさの中で会議の準備をすることはしんどい」という語りから、会議の準備・報告そのものの負担感というよりも、多忙な業務の中で会議に要する時間・労力をかけることへの負担感が現れた結果ではないかと考えられる。

《自分ではどうすることもできないことへのネガティブな感情》に関しては〈人事に関すること〉と〈労働条件・環境に関すること〉があげられた。自分の希望しない人事が行われることへの負担感や休憩時間が取れない、園外研修を受けられないなど現場の保育者が改善に関わることが困難な事柄については負担感が強いことが分かった。園長や経営者など管理職にある者は、現場の保育者が改善に関与することができない事項に関し、十分にコミュニケーションを図りながら進めていく必要があるのではないだろうか。

3) 保護者とのコミュニケーションに起因する大変さ

コアカテゴリー【保護者とのコミュニケーション】の分析から、保護者からの理不尽な要求やクレーム、保護者の子どもに対する問題行動、保護者との人間関係がうまくいかないなどの状況は、保育者にとって大きな負担になることが分かった。保育時間は幼稚園の場合約4時間、保育所(園)の場合約8時間が標準となっている。保護者にとって1日の大きな時間を子どもと離れたまま過ごすことになる。保護者が自分の子どもの様子を尋ねたり、保育内容について問い合わせをしたり、子ども同士のトラブルなどについて担当の保育者へ相談することは当然起こり得る行為であろう。徳田(2000)は、保育者が対応に困る保護者について調査を行った結果、幼稚園が「過保護・過干渉、自己中心的・わが子中心、生活がルーズ」、保育所(園)が「自己中心的・わが子中心、生活がルーズ、子どもに無関心」であることを見出している。保護者とのコミュニケーションにおいて、保育者にとってどのような要求やクレームが大変なのか、個々の園で事例を積み上げ、保育者間で対応についての共通理解を図ることが必要であろう。また、外部の専門家の支援を図ることや当事者となる保育者への確固としたサポートも必要であると考えられる。

4) 保育職のやりがい

東京都社会福祉協議会保育部会保育士会は2005年に保育士801人を対象とした調査を実施し、保育の仕事に働きがいを感じる保育者の割合は約63%であるという結果を得ている(垣内・東社協保育士会, 2007)。この結果から保育者の半数以上が保育職にやりがいを感じていることが推察できる。本研究において、「保育職のやりがい」を構成する要因として《子どもの成長の喜び》、《保育内容の実施に持てる力を発揮できたこと》、《保

護者からの理解と支援》、《職場の人間関係で得られる満足感・達成感》があげられた。

ここ最近、保育研究では「保育者効力感」という概念が注目されている。保育者効力感とは、保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念である(三木・桜井, 1998)。前田・金丸・畑田(2009)は「保育者効力感は保育業務に関する自信とスキルであり、これが高い人は、日常の業務を円滑に行うことができ、その結果、職務内容に関する満足感が高くなる」と指摘している。

本研究の結果、保育者は、「これまでできなかったことができるようになった」という子どもの成長の姿に保育者としての喜びを感じる事が分かった。また、保育内容が想定通り実施できたという満足感が得られたとき、保育内容の実施により子どもの態度や行動に効果が認められたとき、やりがいを感じる事が分かった。本研究で抽出されたこのような保育者の意識構造の特性は、保育者効力感を表わすものと考えられる。コアカテゴリー【子どもの成長・保育内容】は、保育者効力感が高まる働きをする保育体験が「保育職のやりがい」にむすびつくことを示唆している。

子どもの成長や保育内容など保育者効力感に関する事だけでなく、保護者や職場の人間関係から得られるコアカテゴリー【サポートの確からしさ】も「保育職のやりがい」につながる事が判明した。この結果は、保育者の精神的健康にソーシャルサポートが影響を及ぼすという先行研究の指摘と一致している(嶋崎, 1998 ; 西坂・岩立, 2004 ; 上村・七木田, 2006)。職場の人間関係や保護者からソーシャルサポートを受けることができる保育者は「保育職のやりがい」につながり、ソーシャルサポートを受けることができない保育者は「保育職の大変さ」につながると結論づけてよいだろう。

コアカテゴリー【子どもの成長・保育内容】と【ソーシャルサポートの確からしさ】で構成される「保育職のやりがい」はコアカテゴリー【保育者としての誇り】と相互に影響することが判明した。「保育職のやりがい」の高まりは【保育者としての誇り】につながり、【保育者としての誇り】を感じている保育者は仕事にやりがいをもって取り組んでいることが示された。

5) ネガティブな発想・感情、ポジティブな発想・感情

「保育職のやりがい」と「保育職の大変さ」の背景に「ネガティブな発想・感情」と「ポジティブな発想・感情」が関与していることが示された。「ネガティブな発想・感情」は

「保育職の大変さ」から生じる意識構造であり、ストレスや身体的疲労感、精神的疲労感、労働負担感として自覚されるものである。一方、「ポジティブな発想・感情」は「保育職のやりがい」と「保育職の大変さ」に相互に影響を及ぼす関係性にあることが分析の中から浮かび上がってきた。「ポジティブな発想・感情」とは、例えば調査協力者の「毎日の仕事はきつくて疲れるけど、子どもたちの笑顔を見ると元気が出てくる」、「大学の時から保育者の仕事は大変だということはわかっていたし、専門職だから大変なのは当たり前」、「保育者になって心からほんとに良かったと思う」という語りから示される意識構造である。

調査協力者の語りから、「保育職のやりがい」は「ポジティブな発想・感情」にストレートにつながるが、逆に「ポジティブな発想・感情」から「保育職のやりがい」が生じる意識の動きも見出された。保育者としての意識構造に「ポジティブな発想・感情」を有している保育者、例えば、専門職に従事しているという意識の高い保育者やモチベーションの高い保育者は、同じ保育状況においても「保育職のやりがい」を強く感じる傾向にあることが分かった。保育者の「ポジティブな発想・感情」は、「保育職の大変さ」を軽減し、「保育職のやりがい」と「保育者としての誇り」を高める働きをする機能を持っているのではないかと考えられる。本研究は「大変さ」と「やりがい」に焦点を絞った分析であるため「ポジティブな発想・感情」「ネガティブな発想・感情」の意識構造を詳細に分析していない。そのため、本研究の結果だけでは推測の域を超えず、今後詳細な研究による検証が必要である。

本研究は、「保育職の大変さとやりがい」に関する意識構造を把握するため、幼稚園・保育所(園)に勤務する保育者 14 名を対象に半構造化面接を実施し、M-G T A の手法を用いて分析・検討を行った。その結果、つぎの点が結論として得られた。

①「保育職の大変さ」は、子どもとの関係性・保育内容、職場環境・労働環境、保護者とのコミュニケーションの3要因から構成されており、「保育職のやりがい」は、子どもの成長・保育内容、ソーシャルサポートの確からしさの2要因で構成されている。

②「保育職の大変さ」は、保育内容の実施に関する負担や職場の人間関係、保護者とのコミュニケーション、会議や各種書類作成などの事務作業の負担、人事や労働条件などの自分ではどうすることもできない状況下にある場合に意識化される。

③「保育職の大変さ」は、ストレスや身体的疲労感、精神的疲労感、労働負担感という「ネガティブな発想・感情」として意識化される。

④「保育者のやりがい」は、保育内容の実施が期待通りの成果をあげ、その結果として子どもの成長を感じとることができること、職場の人間関係や保護者からソーシャルサポートを受けることができる状況下にある場合に意識化される。

⑤「保育職のやりがい」は、保育者としての誇りにつながる。「保育者のやりがい」と保育者としての誇りは「ポジティブな発想・感情」と相互に関係している。

⑥保育者効力感は「保育職のやりがい」に影響を及ぼす。

⑦保育者の「ポジティブな発想・感情」は、「保育職の大変さ」の意識構造と相互に影響を及ぼす関係にあり、「保育職の大変さ」に起因する負担感を軽減する働きを行う。

⑧保育者の精神的健康は、「保育職の大変さ」「保育職のやりがい」など保育内容や労働環境、ソーシャルサポートに起因する意識構造と「ポジティブな発想・感情」という意識構造のバランスによって決定される。

(4) QWL 支援プログラム

保育者のワークストレスの分析及び保育者の意識構造の分析結果から保育者の QWL は「大変さ」「やりがい」の 2 要因構造モデルで説明できることが判明した。そこで、M-GTA による分析から大変さ尺度 19、やりがい尺度 17、計 36 の尺度が QWL を測定する尺度として構成された。

【大変さ尺度】 19 尺度

毎日の保育前の準備、保育後の片づけ、子どもへの対応、身体的負担、時間外勤務、上司との関係、同期との関係、後輩との関係、会議の準備と報告の負担、事務作業の煩雑さ、人事に関すること、労働条件・環境に関すること、保育相談(園における子どもの相談)、育児相談(主に家庭における子育て相談)、保護者の行動と家族との関わり、ストレス、身体的疲労感、精神的疲労感、労働負担感。

【やりがい尺度】 17 尺度

子どもの成長を感じる、子どもの態度や行動卒園児との関わり、保育内容が想定通り実施できた、保育内容の実施に効果があった、保護者から信頼され感謝される、保護者からの支援、先輩の保育者との関係、同期・同僚との関係、後輩との関係、外部の人との関係得意分野の評価、保育者になれたこと、子どもや保護者からの感謝、保育職の専門性、仕事から得られるもの、社会的な評価。

(5) ICT を利用した QWL 支援プログラムの活用

東京都内の私立幼稚園 1 園、私立保育園 1 園を対象に本研究で得られた QWL 支援プログラムの有効性を測定した。各園とも園内に LAN が整備されており、ID と個人別パスワードを入力すると QWL 支援プログラムにアクセ

スできるシステムを構築した。保育者は QWL の「大変さ尺度」、「やりがい尺度」項目に 5 件法で回答し、QWL の回答を示すグラフと QWL 得点が画面に出現する。QWL 支援プログラムを利用した保育者 8 名(幼稚園 4 名、保育園 4 名)に項目、グラフ、QWL 得点のわかりやすさ、QWL 得点と自己評価との関係、QWL 支援プログラム利用に関する自由記述で構成されたアンケートを実施した。その結果、QWL 支援プログラムによる自己評価の結果が保育者としての自らの身体的・精神的健康状態や仕事に対する満足感を的確に示しているとの評価が得られた。この結果は、ICT 利用により QWL 支援プログラムが有効に活用されることを示唆するものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

金城 悟、安見克夫、中田英雄: 保育職の大変さとやりがいに関する保育者の意識構造について-M-GTA による分析の試み-、東京成徳短期大学紀要、第 44 号、2011、25-44

[学会発表] (計 1 件)

金城 悟、金城久美子: 保育者のワークストレスは低減しているのか? -1996 年と 2011 年の比較-、2012、(印刷中)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金城 悟 (KINJO SATOSHI)

東京成徳短期大学・幼児教育科・教授
研究者番号: 70225118

(2) 研究分担者

中田 英雄 (NAKATA HIDEO)

筑波大学・人間総合科学研究科・教授
研究者番号: 80133023

安見 克夫 (YASUMI KATSUO)

東京成徳短期大学・幼児教育科・教授
研究者番号: 30389861